

公共空間における教団の役割

二〇二三年十二月二十日、第十二回宗門教学会議がオンラインにて開催されました。今回のテーマは、「公共空間における教団の役割」です。

日本において、国家・権力と宗教との関係が社会問題となつていきます。宗門における国家・権力との関係は、「信教の自由」を抑圧されたことへの反省から、国家からの強制への批判、国家がもつ権力への批判を中心として問われてきました。この際、「国家・権力を批判する教団」として、「国家と教団」を二項対立で理解していくことができます。この立場が重要であることは間違いありませんが、「多様な利害や価値観、世界観をもつ個人や集団が共存しつつ、共通の社会を構成している」という前提のもとに、開かれた討議と合意形成に参加していくような社会空間」（『政治と宗教』岩波書店、二〇一三年）である「公共空間」における「宗教と国家・権力・政治」との関係を問い直すためには、「国家」と「教団」という二項対立のみではなく、国家と個人との間に教団を立て、国家にも個人にも与しない教団独自の立ち位置を明らかにするという視点も重要になってくると考えられます。そこで二〇二三年度は今後、社会の中で宗教教団がどのような役割を担うべきであり、本宗門独自の役割はどこに見いだせるのかといったことを議論するため「公共空間における教団の役割」をテーマとしました。

第十二回宗門教学会議では、委員として東京基督教大学名誉教授の稲垣久和氏、東京大学名誉教授の黒住真氏、龍谷大学名誉教授、本願寺史料研究所所長の赤松徹眞氏をお招きしました。座長は、浄土真宗本願寺派総合研究所所長（当時）の満井秀城が務めました。

今号は全体討議について報告いたします。

宗門教学会議は、現代社会の諸課題に対して専門的見地を有する有識者を招聘し多角的・学際的な議論を行つていきます。その際になされる有識者の意見・提言は宗派の見解を代表するものではなく、宗教者が持つ知見が現代社会においてどのような位置にあり、「自他共に心豊かに生きることのできる社会」の実現のためにいかなる役割を果たしうるかを探るための参考としています。



○満井 稲垣先生、黒住先生には貴重なご提言をいただき、ありがとうございます。座長を務めさせていただきました満井です。

まず有識者としてご参加いただいております赤松徹真本願寺史料研究所長から両先生にご質問をいただいて、その応答を絡めながら稲垣先生、黒住先生、赤松先生のお三方で議論を進めていただきましたと思います。議論の進行等は副所長の寺本が務めさせていただきます。

では赤松先生よろしくお願いたします。

○赤松 よろしくお願いたします。稲垣先生からは、公共空間における宗教教団の役割ということでお話をいただきました。私たちが比較的親しみのある言葉として長年聞いている概念、言葉としては社会という言葉があります。ただ、社会と言っても、さまざまなありようや空間の設定によって、ずいぶん理解の仕方も異なると思います。

稲垣先生は、最初に日本国民の幸福度の低さをご指摘されました。「失われた三十年」という言い方もありますが、

ブル崩壊後の日本社会、新自由主義という流れの中で戦後日本社会が築いてきた終身雇用や、それぞれの社会構造の変化が劇的に進んでいき、一方で非正規雇用といわれる人たちが、現在でも約二千万人おられるという統計結果も出ております。そうした中で人びとの外面的な幸福というものの条件、外面的な幸福度の尺

赤松徹真氏

【略歴】

一九四九年生まれ。龍谷大学名誉教授、本願寺史料研究所長。専門は、日本仏教史、真宗史、近代史。龍谷大学を卒業後、龍谷大学文学部講師、助教授、教授を経て、現在に至る。著作に、『新佛教』論説集』全四巻（共編、永田文昌堂、一九七八〜一九八二年）、『資料清沢満之』全三巻（共編、同朋舎出版、一九九一年）、『日本仏教史における神仏習合の周辺』（永田文昌堂、二〇一三年）、『近代真宗者の「神社問題」論説集成』全九巻（三人社、二〇一九年）などがある。論文に、「大谷光瑞の『満州国』論から『大東亜共栄圏』論―大谷の仏教・真宗論の立場との関係―」（『仏教史研究』五八号、二〇二〇年）「浅野研眞の思想と社会的実践―仏教理解とその実践としての仏教社会学及び仏教社会事業―」（『仏教史研究』六〇号、二〇二二年）など多数。

度では、必ずしも充足感を得ることはできないという環境にもあろうかと思えます。

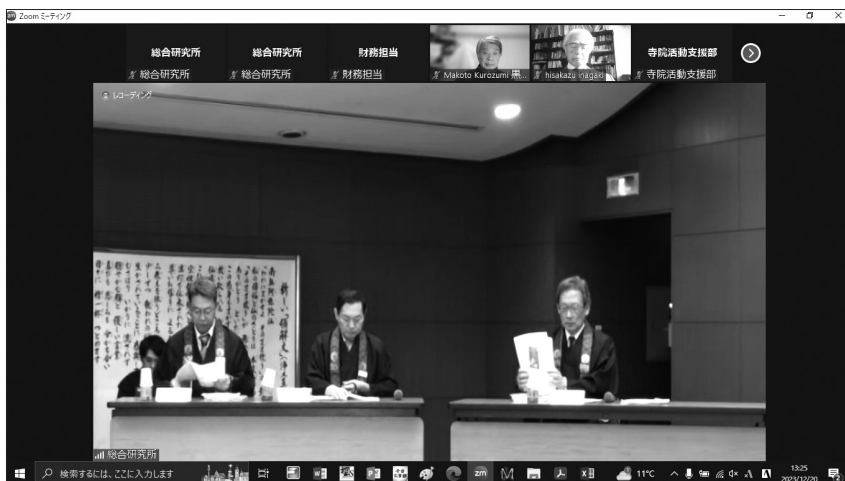
仏教の伝統的な理念としては、「僧伽（サンガ）」という言い方がされますが、それは、信仰、宗教信条を持っている人たちが、社会的なそれぞれの属性を超えて集まる、というところに教団を考えることができると思います。それは、それぞれがさまざまな職業の属性を持ち、その属性に関わる価値観などを持ちながらも僧伽に集うことによって、自らの所属する属性を、あるいはその属性に関わるような意識を超えたかたちでいろいろな方々が共に集える場所としての教団です。

その場において、人びとは充足感、あるいは満足感を持ちながら属性を超えた対話、信頼を得る。また、多くの人たちとの関係においては、人びとがもつ属性が必ずしも一方的に単純な価値観としての意味を持つものではないというような経験をされるものと思います。

人びとや集団が公共空間において、国や自治体によって構成されるものとは違った意味合いで、重要な役割を果たすというのは、そのとおりだと思います。そこで、そうした集団、あるいは具体的な空間を、どのようにつくっていけばいいのかということのお知恵をもう少しお聞かせいただければと思います。

次に、黒住先生のお話について質問させていただきます。

現代の日本社会の一部を考えると、かつての日本の文脈だけにとどまらずに、グローバル化の中で日本の国内にも、日本の社会に定着、移住する、あるいは一部は避難する方々がおられます。そういった人たちの中に、キリスト教的な背景を持った方、一方では東南アジアの宗教関係、あるいはイスラムの背景を持った方々もいらっしゃいます。そういった方々が日本社会の中に広く、定着、移住することに對して、日本社会はどんなことをしていくことで開かれた社会となるのかということについて、お聞きできれ





ばと思います。

一・僧伽―「属性」を超えて集まる

○稲垣 所属から出て僧伽として仏教の慈悲のころろなどを共有する。また修行する場としての僧伽の意味は、非常に重要だと思っています。しかし、所属を超越するという自体は、一般の門徒に

とっては難しい。いわば全てを捨てて、僧伽に帰依するということであれば、それは出家ということでしょうか。出家の重要性を前提にしてのご質問ということ

でよろしいでしょうか。

○赤松 浄土真宗は在家教団ですので、出家という意味ではなくて、門徒の人たちは、帰敬式という仏弟子になる儀礼を通して仏教徒であるという意識を持つ。

そういう立場に立った上でのご質問ということです。

○稲垣 一つは、生きていくための経済の問題です。それを否定できない。今の日本の大問題は企業社会になってしまつて、日本の社会そのものが企業活動や市場原理で動いて、公共空間そのものが覆われていく状況にある。そうした中で仏教信者たちが門徒として集まつて、さま

稲垣久和氏

【略歴】

一九四七年生まれ。東京基督教大学名誉教授。博士（理学）。専門は、キリスト教哲学、公共哲学。科学とキリスト教。国際基督教大学講師、アムステルダム自由大学哲学部・神学部客員研究員、慶應義塾大学文学部講師、ルーテル学院大学講師、東京女子大学講師などとしても教鞭をとった。一九九〇年より東京基督教大学教授を歴任し、現在に至る。著作に、『閉塞日本を変えるキリスト教―公共神学の提唱―』（水山裕文との共著、いのちのことば社、二〇一三年）、『神の国と世界の回復―キリスト教の公共的使命―』（教文館、二〇一八年）、『公共福祉とキリスト教』（教文館、二〇一二年）、『宗教と公共哲学―生活世界のスピリチュアリティ―』（東京大学出版会、二〇〇四年）など。編著として、『シリーズ公共哲学十六宗教から考える公共性』（東京大学出版会、二〇〇六年）などがある。論文に、「モラル市民社会へのキリスト者の役割―公共福祉学のアプローチ―」（キリストと世界 東京基督教大学紀要）二二二号、二〇一二年、「公共哲学と宗教倫理―「幸福な社会」形成のエートス―」（『宗教研究』八三巻二号、二〇〇九年）など多数。

さまざまなことを互いに話し合うといった場所は大事だと思えますし、それがないと人間性を回復することは、現代ではとても難しいと思います。

では、公共空間の中に具体的にどう慈悲のこころを及ぼしていけるか。私は、F E C C、①食料自給 (Food)、②エネルギー自治 (Energy)、③コミュニティ (Community) のモラル (公共圏への慈悲の心の回復)、④ケア (Care) の心 (福祉国家論のカネの投入ではなくケアのモラル) を、それぞれの場で、それぞれの置かれた立場で意図的に地域の人たちとシェアしていく。人と人との交わり、コミュニティの形成の中に自然に慈悲の心が出てくると思います。

属性がそれぞれ違うというのが重要で、多様性を持った人たちが集まれる場が僧伽だということになれば、僧伽の重要な役割があると思えます。そのような僧伽をどのようにつくっていくかは、それぞれの地域ごとに持っている問題性が違うので、具体的に共同作業を隣近所で

していく中に、慈悲のこころが公共空間に出ていくということは可能だと思っています。

二. 人間の物象化に反対する

○赤松 ありがとうございます。それでは黒住先生、ご教示いただけませんか。しょうか。

○黒住 これはあまり述べる時間がなかったのですが、近代史は資本主義的な運動です。経済成長して文明を上昇させていこうとする運動で、一部の人間だけがうまく生きていくということから、実は差がものすごく発生しているという問題があります。

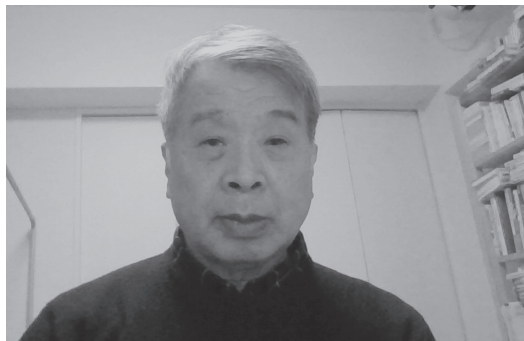
例えば、人間がよい生活をする、一方で他の人間の生活のみならず生物多様性がどんどん失われている。地球全体に対して破壊活動をしているとも言えます。そのような危うさを、今こそはつきりと考えないといけないと思えます。

現代のシステムは巨大化し、人間はそ

の中で使われる道具になっている。若い人たちは、うまくいつているかのようで、実際は満足していないで、ものすごく落ち込んでいくといった構造の中に入り込まれていると思います。つまり、人間自身の実際の意味付けみたいなものがものすごく消えているんです。これが物象化と言われますけれども、自身自身の魂の意味付けが感じられもしないといったことが、発生していると思えます。

日本は「島国」であって他国と交流はあるものの、より「閉じた」傾向で鎖国していましたが、明治以後、また敗戦後、「開国」してより「開かれた」傾向へ変わったと言われます。また和辻哲郎などは、その文化や精神には「依存」的な持続があるとも見えています。そう見えるなら、何に依存するかが大事です。近代史が無視した自然自体がそこにあると考えられます。教団、教会、公共的組織はそこからの成立です。

私自身は、単に物象化したり、同一化



したり、システムの中でだけ動くというのではない、人間がもともと持っている基本感覚みたいなものを見つけるといことが、テーマとしてあると思います。日本の中にもともとあったいいものというのは、実はすぐあつて、それを見つけて直してもいいと思います。

例えば公害問題で活躍された石牟礼道子という人がいます。彼女は結局、浄土真宗に向かい十九世紀より前の日本がよ

かったということを行っています。また、中村哲という方は、キリスト教徒ですけれども、産業や川を海外でつくるるときに、江戸時代の人びとのやり方、川や水の流れ、流し方のようなものは、今でも学ぶところがあるといわれ、実践されていきました。

そういった基本感覚のようなものを見つけたらと思います。

三、宗教の役割

○稲垣 一つだけ付け加えます。具体的に寺院が地域において何ができるかということです。例えば子ども食堂をやり、地域の人たちがそこに集まってくる。そういうふうには積極的に現代的ニーズに対してオープンになるということが可能だと思えます。いろいろなかたちでどんな

黒住 真氏

【略歴】

一九五〇年生まれ。東京大学名誉教授。博士（学術）。専門は、東アジア日本思想史、比較思想宗教、神学。東京大学及び同人文社会科学大学院を修了後、東京理科大学助教授、東京大学教養学部助教授を経て、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部教授を歴任し、現在に至る。著作に、『文化形成史と日本』（東京大学出版会、二〇一九年）、『複数性の日本思想』（二〇〇六年）、『近世日本社会と儒教』（二〇〇三年）、また共著『日本の祭祀とその心を知る 日本文化事始』（福田恵子と二〇二一年十二月、以上三書ペリかん社）。編著として、『日本思想史講座』（全五巻、ペリかん社）、『岩波講座日本の思想』（全八巻、岩波書店）などがある。論文に、『近世日本における公共のゆくえと現在』（『思想史研究』二〇〇号、二〇一四年）、「公共形成の倫理学―東アジア思想を視野に―」（『公共研究』二巻四号、二〇〇六年）など多数。

属性の人たちも楽しめる場所となる機会を提供していくことによって、まさに寺院がコミュニティの中心になり、公共空間を形成する出発点になると思います。

○黒住 役割や自分というものの意味付けが大事だと言いましたが、同時に、仏教でもキリスト教でも重要なのは、死の問題です。近代の日本の場合は、死の問題を消しているところがありますが、中世の思想や文化は、死者との関係を持っているといわれます。そして、そうした考えの方が人類史的には大きかったと思います。

そういう意味では、例えば、親鸞聖人はいわば肉体的には亡くなった方ですが、私たちの中には生きていくわけですが、私たちの中には生きていくわけですが、このような、現代の人間には感じないような、少なくとも中世から近世初期ぐらいまでは持っていた感じ方を、もう一度見つけるといことがあっていいのではないかと思います。

○寺本 稲垣先生にご質問させていただきます。公共性を意識してコミュニティ

を回復するとき翻訳という作業が重要になってくると聞かせていただきました。先生にお示しいただきました公共空間、そして親密空間という図から連想いたします。戦前の日本は、国家が公共圏も支配し、そしてまた親密圏も支配したというような国家観であったと理解いたしました。

そのことに重ねてですが、翻訳のときに誰に向かって、つまり、どの他者に向かって翻訳していくのか。翻訳時に気を付けなければいけないことは何だろうか。他者とは、他者性とはいったいどのようなものであるのか。これが一つの質問です。

加えまして、これは単純に上からの権力、下からの自治という、上から下からという言葉から少し連想しまして、例えば、上からのキリスト論、下からのキリスト論というようなかたちで、神学的な課題にしていく、そうした面での先生の神学作業の展開をお聞かせいただければと思います。

黒住先生にも同じ質問ですけれども、大乘仏教やキリスト教などの血縁を乗り越えていく運動が起こっているとおっしゃっていただきました。そのときに神学、教学の課題としてきたのは、仏性やキリストという事柄に象徴されるような、足元の魂の位置付けの問題であると聞かせていただきました。

先生は、「理」に対して「氣」というかたちで、その問題を思想史の中での一つの流れとしてお示しいただいたと思います。そこをもう少し仏教者や宗教者たちが、どのようにこの「氣」、あるいは魂の位置付けといったものを、神学、教学的に捉えてきたのかご紹介いただければと思います。

○稲垣 翻訳のときに気を付けることで、目の前にいる人に向けて対話をするときの、その人の生活している背景によって翻訳の仕方が全然違うと思います。例えば、いわゆるシングルマザーで日々たくたくに働いているお母さんがいます。そういう人たちには、隣人愛とい



う言葉や愛の言葉はわかりやすく、人を励ます。キリスト自身が苦しまれたという物語がありますから、話しやすい。これに対して、権力者にキリスト教の言葉、信仰の言葉を翻訳する時は神の正義、例えば「殺すな、盗むな、偽証するな、(金銭を) むさぼるな」というモーセ十戒の内容からの翻訳でしょう。

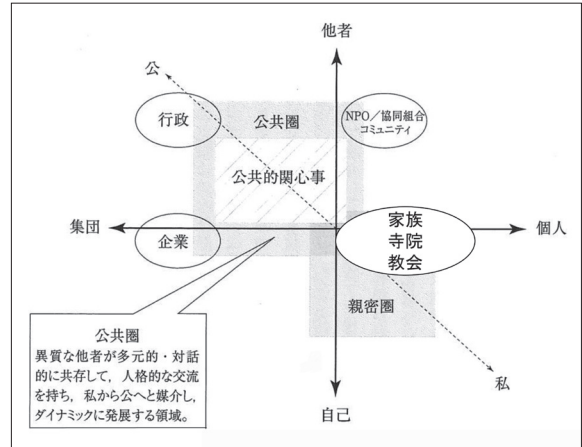
ですから、キリストが言う愛や義を、人の顔を見ながら、その人にふさわしい言い方で翻訳をしていくということは、誰もが大小なり小なりやっているわけですが、特に多様な人たちとの交流の中でコミュニケーションをつくっていくときには、翻訳は非常に難しい。人格的な交流、コミュニケーションが絶えず行われていないと、すぐに言葉は出てこない。いろいろな人たちとの付き合いがある中で自然に出てくる翻訳の言葉、それが大事だと思います。

それから神学の問題です。例えば、家族と国家は、神学的に意味が違っている。どういふことかというところ、『創世記』

にアダムとエヴァが出てきて、男と女とが親から離れて互いに一体となるべきであると、結婚のもとになるところがあります。まさに創造の秩序としての夫婦であり、家族という見方があります。ですから、家族という制度そのものは創造の一つの秩序という神学的な位置付けがあります。

これに対して、国家は神の創造のときには存在していません。では、いつから国家が生じてきたかというところ、これは人間が墮落して罪を犯し、その罪の中にいる人間が互いにそのままいると平和を乱し、戦争をする。それを抑止するために国家という権力装置ができてくるのです。神学的には、まさに罪を犯した人間であるがゆえに、国家は存在しなければいけないと理解します。ですから、国家が消滅すると危険だという見方は、普通のキリスト教神学ではすると思いません。

逆に、国家の過剰権力は個人の自由と尊厳擁護の面から否定されます。いずれにしても、全体を総合的に統一



「自己-他者」と「親密圏-公共圏」の図

しているのは、いわゆる父・子・聖霊なる三位一体の神の統御の中にあるがゆえにということが前提になります。ですから、ある意味で信託という議論が四セクター論（右図）ではとても重要です。信託というのは、信頼して委託するという意味ですけれども、神から委託された制度として、それぞれの領域に限って、その機能を発揮しなければいけないということです。例えば、国家という制度が家

族という制度の中に入り込んでくるということになると、これは領域の違う主権の侵害だという意味で、神学的には明らかに禁止されるということです。

○黒住 「理」の問題や「気」の問題。

結局、「気」というのは広い意味では生命ですけれども、先ほど上・下という言葉を使われたかと思いますが、昔の比喻としては父と母に関係付けられている場合が多く、上が父、下が母という傾向があります。その中で大きくいうと、横の

水平感覚と、縦の垂直感覚との関係のよ

うな問題として出てきています。例えば、「気」の問題や横の関係だけだったら、それ以上が出てこないわけです。そのときに超越性とか、垂直的なものを人間は求めている、理気論という理がより関わってくると思えます。逆に「理」の問題、縦の垂直関係だけだったら、足元のものや横の関係が広がりません。これは近代的傾向でもあり、キリスト教の場合、そこからマリアや聖霊に女性を見出す動きが生まれてもいます。

仏教においても母が出てくるのではと考えられます。

この問題は、ギリシャ哲学では死自体が把握されていないことに対し、キリスト教や大乘仏教が死を把握したと関係すると思えます。大乘仏教が単なる輪廻論の中に入ってしまったわけではないからです、そのときに死をどう見るかというテーマが仏教の中にもあると思えます。

四. 歴史をかえりみ、公共圏へ

○満井 両先生に、これからの本願寺教団の在り方、目指すべき方向性のようなご提言を短くおっしゃっていただければありがたいと思えます。

○稲垣 やはり鎌倉時代からの日本の歴史を見てきたわけですから、日本のいろいろな弱点を知り尽くしていると思うので、今のこのときにどういう弱点が現れているかをあきらかにする。また、寺院は教会以上に日本では根付いており、地域の方たちから何らかの信頼を持たれて

いるわけですから、なにがしかのかたちで具体性のあることに踏み出せば、地域の公共性の活性化に寄与できると思います。

○黒住 私自身、二十一世紀は従来の分

類が最終的に乗り越えられているというか、連関がどんどん発生している時代でもあるかなと思います。例えば和辻哲郎は、戦国期、まだキリシタンが入っていないときの仏教の教団や仏像の様子とキ

リシタンとの関係を関連させて見ています。そういう意味では、分類は大事なんですけれども、自分たちの枠組みの大事さを持ちながらも分類を越えて広げていくということもあっていいと思います。

閉会挨拶

浄土真宗本願寺派総合研究所長(当時)

満井秀城

あらためまして稲垣先生、黒住先生、赤松先生には貴重なご意見を賜り、ありがとうございました。

稲垣先生のご提言から汲み取っていただくべきは、権力をいかに相対化すべきかという課題が宗教教団に課せられているということとです。しかも、その権力的存在とは何かということについて、今まであまり気が付くことのない

かった貨幣権力というものにあらかじめ直面させていただきました。宗教教団としては、見返りを求めないという基本姿勢をあらためて思い出させていただけました。

黒住先生のご提言から汲み取っていただくべきは、Bの中の円をどうわれわれが認識していくかということとを、常々、一人ひとりが問い直していくべ

き姿勢です。

この宗門教学会議は現状、われわれ本願寺教団が直面している社会的課題について、有識者の先生方からご提言をいただき、それを私たち宗務員がそれぞれの部署において、活動を反映していくという立て付けで行われております。

今後とも本願寺教団に對しまして、ご協力、またご支援等々、お願いをいたします。時間の制約でご迷惑をおかけいたしましたけれども、長時間にわたってありがとうございました。あらためて皆さま方に御礼申し上げます。